

月から數ヶ月の間鎮海灣の訓練に参加し、その後の日本海の家戦にも参加したが、こゝでの海戦は餘りに有名であるから別の機會に述べるとして、三十八年の八月だつたと思ふ。佐世保で旗艦三笠の火薬庫が破裂して、歴史的な三笠が沈没したので、その日から聯合艦隊の旗艦は敷島に変更され、同年十月二十三日に行はれた横濱沖での凱旋觀艦式には、敷島艦上高く司令長官旗が秋風にハタ／＼と翻つてゐたものである。

机邊雜話

海上權と國運

日本といふ國は、元來が海上權の確保に依つて出來上つた國である。

これは史書を繙いてみると誰にも判ることであつて、建國の第一歩である神武御東遷は、先づ瀬戸内海の海上權をお持ちになつて、海上をずつと東へ御進みになつてゐる。往古、日本の一番大きな海上範圍は、ちやうど歐洲に於ける地中海の如く、瀬戸内海だつたのである。そこでこの内海の海上權力を掌握されつゝ、天皇は遂に大和までお進みになり、はじめて日本建國の大業を完ふ遊ばされたのであるが、その後日本が非常に發展したときを見ると、いつも海上權力を握つてゐる。

即ちその後、海上權が瀬戸内海から朝鮮海峡に伸びた時、朝鮮に植民地が出來て、みなな任那には日本府が設けられた。そして彼我の交通貿易が旺んに行はれた。朝

鮮が貢物を持つて来るやうになつた時には、對島から南朝鮮一帯にかけての海上權力が日本の手に確保されてゐる。そしてこの勢力は天智天皇の御代まで續いた。所がその後白村江の海戦で大敗を蒙つてからといふもの日本の海軍は全然首を縮めてしまつた。その結果國防方針は局地防禦だけになつて、只僅かに防人が沿岸防禦に甘んずるだけとなり、海上へは全るで出なくなつてしまつた。そこへ起つたのが蒙古襲來である。

これは日本の海軍がすつかり引込んでしまつた隙に、今度は逆に高麗の海軍や、蒙古方面から乗出して來た支那の水軍が、旺んに跳梁を始め、果ては日本の九州方面の海上權までが、朝鮮海軍や支那海軍のものとなつてしまつた結果であると思ふ。

文永十一年の第一回蒙古襲來の時には、壹岐、對馬を侵した蒙古軍は遂に博多灣の今津に上陸して、博多の街を焼き、博多附近から太宰府の邊りまでも攻め込

んで、この地方の住民は爲に非常な慘害を受けてゐる。我が軍は一時太宰府附近まで退却し、水城に依つて敵を禦がうとしたので、我が逆襲を恐れた敵は、遂にその夜博多灣内の艦船に引上げてしまつた。と、その夜偶々大暴風雨が起り、敵軍は大半を傷け命からがら朝鮮南岸に引き揚げてしまつた。これが文永十一年の役である。

その後七年を経て弘安四年の時には、肥前の鷹島で、寧波方面からやつて來た宋の水軍（江南軍）と蒙古、高麗の水軍（北路軍）とが合同して、また同じことをやらうとしたのだが、博多灣進入の前夜、彼の大暴風雨となつて上陸する暇もなく木葉微塵になつてしまつた。

その前、博多灣沖に先着した北路軍の艦隊に對しては、今で云へば驅逐艦、水雷艇の敵艦襲撃のやうに草野次郎、河野通有等の猛將が出て行つて敵を夜襲し日本水軍の意氣を示した。これには敵も非常に苦しめられた。この防禦の爲、敵艦

は鐵鎖で互に連結した。これが彼の大暴風雨の際大いに祟り、鐵鎖を切る暇もなく互に引つ張られ乍ら沈没すると云ふ様なことになり、殆んど全部が覆没し、結局生存者僅かに三人といふ文字通りの全滅を喫した。

—この蒙古襲來こそ、日本が海上を閑却した結果だと思ふ。しかし、餘り酷い天罰も可哀想だとも思召したか、神風が吹いて「さあ、これから精神を改めろ」といふ教訓を與へられたのだと思ふ。

そこで、日本人は發奮して小さな舟を操つて大海に乗出し、朝鮮沿岸から支那海の方まで活躍するやうになつた。これによつて島國に住んで居る日本人の天性が再び復活したのである。

たゞ惜しいことには當時日本に國策といふものがあつて、我が水軍が統制され編成されて、これを後方から掩護し「日本の商船に指一本でも差すものがあつたら肯かぬぞ」といふ勢力を持つて居たら、その當時既に、日本の南方への發展は

非常に旺んなものとなつたに相違ない。そして、そのまゝ、ずつと發展して居たら、ルソンとか瓜哇とかボルネオといふやうなところは、恐らく日本勢力範圍になつて居たのではなからうか。

x

然し、残念なことには、足利義滿の對支亡國外交の爲に日本人の海外發展を抑へてしまひ、その後日本は戰國時代になつて、國內の爭亂に外を顧る餘裕など全くなかつた。

そして、豊臣秀吉に至つて、海内統一が行はれて後、再び海上に目を注ぐやうになつた。日本國の平定を了へた秀吉は、海の彼方の支那を一つ従へてやらうと考へた。——大明國の征伐、これは海外發展の尤なるものである。

たゞ秀吉の爲に非常に遺憾に思ふことは、水軍の整備と訓練といふことをさつぱり行はなかつたことである。彼は「朝鮮海峽を渡つて、そして本國と連絡をと

ればいゝ」唯それ位のことしか考へて居なかつたやうである。秀吉とかナポレオンとかいふ大人物の跡を振返つて見て、私が特に感じるはその點である。秀吉等が陸軍の整備といふことに意を用ひたのに比して、制海權といふことに甚しく注意を怠つたといふことは遺憾に堪へない。

秀吉は船を造り又人に乗せればそれで水軍が出来上ると考へてゐた。しかしそれ丈では水軍は出来ない。肝腎の訓練が出来てゐなければ水軍とは云へないのである。船を造り人に乗せた丈では何にもならぬ。幸ひにもこの時は陸上軍が海峽を渡り朝鮮南岸に上陸して、加藤清正や小西行長等の猛將が短時日の間に朝鮮の殆んど各道を平定したので、日本軍は面目をほどこしたが、水軍の方はどうかと云へば、南岸十數回の海戦で敵の水師提督李舜臣の率ゆる水軍の爲に破られてゐる。幸ひ敵將李舜臣が最後に戦死したので、朝鮮海峽の制海權を完全に彼に制せられる事なく終つたから良かったものゝ、あの時もし朝鮮の水軍が更に進ん

でわが方を追撃して、海峽を抑へてしまつたとしたら、日本の陸上軍はどんな運命に陥つたか判らないと思ふ。敵がそこまでやつて來なかつたのは、誠に倖であつた。

かくて、前後七年に亙る朝鮮の役が不得要領に終つてしまつたのは、この制海權獲得といふ點に於いて遺憾があつたからではないか、私は史書を繙いて斯く思ふのである。

x

所が其後、徳川時代の初期に於ては暹羅とかルソンとかいふ方面には、日本の船が頻繁に行つて旺んに貿易をやり始めた。かくて徳川三代までは、南洋各地に日本人街が出来、マニラには三千人、暹羅の首都アンチャには五、六千人もの日本人が住んでゐたといふことが歴史に見えてをる。これは海を怖れず、海外に發展せんとする日本人が古來からの傳統的な氣風が再び盛んになつてきた結果で

ある。そして若しこの氣風があつたらずつと持ち續けられたなら、日本はもつと海外發展の一路を辿つたであらう。それが三代將軍家光の時代に種々の原因や事情から遂に鎖國令を出してしまつた。誠に残念なことである。

この鎖國の爲に、日本人はいつしか海に對して卑怯な國民であるかのやうな習慣を養つてしまつた。「板子一枚下は地獄だ」「海は恐ろしい」などといふ考へ方は、全く徳川三百年の鎖國に慣らされた一時的の觀念で、今日誰れもそんなことを考へてゐる者はなからうと思ふ。周圍を海に取巻かれた海國日本の國民は、たれもが海を愛し、海をわが家と親しんでゐる筈である。これはそれ以前にルンとか安南、暹羅等に行く航海の模様を書いたものを見ても判ることであつて、彼等は實に暢氣に帆の下で將棋を指したり、カルタをしたりしながら、まるで海の上をわが家の如く考へてゐる。海を以つて家となすといふ思想があり／＼と見えてゐる。それが三百年の鎖國の爲に、次第に海を怖れる氣持となり、陸から見

える狭い海面だけを海と考へ、それから先きは何にも無いかのやうに思つてゐた。

わが日本が、かくの如く小さな殻の中に閉ぢ籠つてゐる間に、歐米の航海者達は、太平洋の横斷や南洋探險等へ續々と乗り出して來た。そして何時の間にか、すつかり繩張りを拵へてしまつた。——これが地理的に恵まれた地位に居り乍ら、日本が全く太平洋や南洋で立遅れをしてしまつた第一の原因であると思ふ。今、日本がかく海から遠ざかつてをつた間に、危ふく大變な目に逢はうとした一例を次にお話してみやう。

嘉永六年、ペルリが浦賀にやつて來て開國を迫つたことは誰でも知つてゐる事であるが、所謂黒船は日本と通商するだけが本來の目的ではなかつたのである。その目的は他にもあつた。といふのは當時わが日本の太平洋岸殊に金華山沖から北海道の東岸にかけては鯨が非常に多く、ペルリ時代には二、三百隻の米國の捕

鯨船が、わが近海まで出漁してゐたのである。これ等の捕鯨船は時々嵐に遭つた、そこで日本の港湾で船を修繕する必要がある。

日本の近海は、世界中で一番天候の悪い處で、常に暴風雨が起りやすい。それで居て日本を離れて二、三日も経つと、急に静かになつてしまふのである。それで、米國が鯨漁業をやつたり又支那と交易するためには、日本で船を修繕し、燃料を補給したり、食糧を仕込んだり病人を治療せねばならない。その必要からペルリは幕府に開國を迫つたのだが、幕府は來年になつたら返事をすると言つて一應追ひ返した。

そこで、ペルリは一先づ香港方面で返事を待つことにした。彼が香港へ行つてどんなことをしたかはつきりしないが、既にそれ以前にペルリは軍艦を小笠原群島に派して、父島二見港の元村に廣大なる土地を買ひ占めて居る。——都合に依つては米國領土とする心算だつたのだらう。さて香港へ行つて、彼は香港總督と

會見し、米國は小笠原群島を米領としたいから左様承知して貰ひたいと云つた。すると、英國當局は、

「それはいかん、小笠原は既に英國が占領したところである」

と、主張した。そこで、米英の間に、小笠原の爭奪論戦があつたようだが、双方とも自分の主張を證明する何の證據もないのである。そして水掛論的な談判を繰返したが、米國としてはこの島を英國にとられることは絶対いやだし、又、英國としても米國のものになることは好まない。

そこで、ペルリはかういふ提案を出した。

「あの島は林子平の三國通覽によると、昔、小笠原貞頼といふ大名が発見した島であるから、これはお互ひに手を出さず日本のものにして置く方が良くはないか。我が方も取らぬ代りに貴國も斷念して貰ひたい」

英國側もそれで安心して、茲に双方の妥協が成立して、あの小笠原群島は何の

異變も見ず今日に至つて居るのである。林子平は熱心な國防論者であり、日本の先覺者である。その三國通覽圖繪には、小笠原島についてかう書いてゐる。

「此島本名小笠原島ト云ヘドモ、世舉テ無人島ト稱スル故稱ニ從ツテ無人島ト表スルナリ。小笠原島ト名付シ事ハ、昔時小笠原貞頼、此島ヲ見出シテ、地圖ヲ持歸リシ故名付シ也。二百年前伊太利人メガランスト云フ者、南方ニ新世界ヲ見付ケタルヲ直ニメガラニカト名付ケタルガ如シ」

と云つて、小笠原の地理と交通の歴史を紹介して居る。小笠原貞頼といふ人は家康の臣で、伊豆網代に領地を持つて居た。或る日、下田に遊んで武山に登り、はるかに大島の噴煙を見てから、——南海探檢の志を起して遂に太平洋の只中にある小笠原群島を發見したのである。そして貞頼は、

「日本國天照皇大神宮地島長源家康公幕下小笠原四位少將民部大輔源貞頼朝臣」と書いた木標を樹て、日本領土たるの印としたのであつた。

この日本領土を危ふく米英の爪牙から救つた三國通覽圖説の功績は、計り知れないものがある、我々は林子平の卓見と功績に對し、今更ながら敬慕の念を禁じ得ない。

以上によつても判る通り、日本といふ國はいつも海上權が確保された時には隆々發展の一路を辿つてゐる。反對にそれを失つた時には發展が止つてゐる。従つて我々は今後益々海に親しみ、海を愛し、層一層國威を世界の隅々にまで發揚しようではないか。

嗚呼東郷元帥

「東郷さんは御飯のやうな人である。御飯といふものは何處が美味しいか判らぬが、二、三日攝らないでゐると何だか食べたくなる。東郷さんもその通りだ」
 いつか徳富蘇峰氏が、かう放送されたことがあつたが、私も全く同感である。元帥には俗に謂ふ逸話と云ふものが全くない。世間でいふ芝居氣或はケレンと云ふものが、些かもないお方である。このことは一見平凡な人のやうに思へるが、元帥の眞價はそこに輝いて居るのである。

私は、日露戦争當時一青年士官として驅逐艦「叢雲」に搭乗して居たが、その間親しく元帥の御言動に關して、未だに忘れ得ぬことがある。それは――

明治三十七年五月十五日のことであつた。旅順方面でわが戦艦、初瀬、八島の二艦が、敵の機械水雷にかゝつて沈没したことがあつた。而もその前夜には、春

日と吉野が衝突して、吉野が沈み、更にその前には小型艦ではあつたが、宮古がこれ又敵の機雷に觸れて沈没してしまつたといふ、云はば御難續きの折からであつた。そして悪い時には悪いもので旅順沖の初瀬の遭難現場附近で、今度は初瀬の乗員を救助した龍田（通報艦）が、急いで根據地へ引上げてゆく途中、又根據地の直ぐ入口に近い島に乗り上げてしまつたのである。

私の乗つた驅逐艦は、丁度初瀬の遭難現場から根據地へ歸る途中、この坐礁した龍田を發見した。そこで龍田から艦隊司令部への報告を持つて、旗艦三笠の直ぐ傍らに行き、龍田坐礁のことを報告したのである。

その時の三笠後甲板に於ける艦隊幕僚の驚愕は一通りではなかつた。何しろ吉野、初瀬、八島と二日の中に三隻が沈んだ上に、又しても龍田が坐礁してしまつたのだから無理もない。

ところが私等は、驅逐艦から三笠の後甲板を見ると、――東郷司令長官の態度

は、例の通りなのである。ゆつくりと静かに後甲板を往復して居られる。少しも驚かれたやうな様子も見えない。私はこの様子を目撃して云ふに云はれぬ力強さを覺えた。斯くの如き艦隊の厄日に於いての司令長官の態度、顔色といふものが、如何に全艦隊の士氣に影響するものであるか、これは今更言ふ必要はなからう。

この沈着なる司令長官の態度こそは、永年の修練と不動の大人格をもつ聖將にして、始めて爲すことの出来るもので、私は今日もつて感激してをる。東郷司令長官のこの態度は實に悄沈せんとした全艦隊の士氣を發揚せしめたる偉大なる原動力であつた。この頃英國の觀戰武官が「一體、東郷大將はどんな顔をして居られるか」と、そればかりを氣にしてよく三笠を訪れたものである。ところが元帥は、どんな時でもあの特有な御微笑を湛へられて、武官を迎へられたので、その武官は、非常に驚き且つ感心して、歸國した後までも東郷元帥の沈着不動の態度

を口を極めて稱讚したそうである。

彼のバルチック艦隊がやつて来る少し前、三笠は吳に入港した。そして東郷元帥は、一日兵學校に行かれたことがある。その時、生徒一同に一場の訓示をなされた。どういふことを仰つたかといふと、

「その中バルチック艦隊がやつて来る。それに對して——我が艦隊は誓つて敵に打ち勝ちますと自分は 天皇陛下に奏上して來た」

と言はれた。兵學校生徒一同は、

「東郷さんは、まだ戦はぬ中から、誓つて打ち勝つと神様の如き事を一人で決めて居られるが、さういふことが一體今から判るのか知ら。若し間違つたら、腹を切られるだらう」

と話し合つたものである。

所が明治三十八年五月二十七日——。

愈々バルチック艦隊が見えて、我が艦隊が出動する時に、

「敵艦見ゆとの警報に接し、我が艦隊は直ちに出動、敵を撃滅せんとす、天氣晴朗なれども波高し」

東郷元帥は、大本營に打電してその決意を示された。この撃滅と云ふ言葉は、初め撃破と書いてあつた幕僚の案を、元帥が自ら筆を入れられて撃滅と直されたといふことである。つまり、奏上の際に於ける固い決意をこの文の中に、その儘示された譯である。

五月二十七日——鎮海灣に出動した我が艦隊は、對馬東方でバルチック艦隊と出會つた。その前に有名なZ信號があがり、全艦隊は奮ひ起つた。敵艦隊の黄色の煙突が漸くに見えて来る。敵艦隊は、二縦列となつて、北上して来る。我々は北方よりこれに接近して行つた。

この時、我が艦隊の行動に二つの方法があつた。一つは其儘敵と反航戦をやる

法、他は思ひ切つて左方大轉舵をやり、敵と並行戦をやる法である。三笠の艦橋では種々と研究されたらしい。詳しい事は私等は勿論、二番艦に居つたものには判るものはない。

ところが午後二時五分だつたと思ふ。東郷司令長官は大きく右手を上げて左へ廻された。即ち「取り舵」を取れ「左へ大轉回をせよ」との命令だ。——三笠はそこで、左へ大轉回をした。これを見た露國艦隊司令部では大いに喜んださうである。何となれば三笠以下の十一隻の日本の主力戦隊は、各艦皆その轉回位置で轉舵するから、そこへ彈丸を打ち込めば、必ず命中彈致命傷を與へ得ること必定だからである。こちらにとつては大變な危険を冒すことになる。

敵は、時こそよしとどん／＼打ち出してきた。我が艦隊はこの運動を終るまでは相當の敵彈を受けることは元より覺悟の前であつた。しかし幸ひにして致命傷はなかつた。そしてこの難關を見事突破した後は、我が全艦隊の全彈は敵艦

隊に集中することが出来たのである。これが所謂有名な丁字戦法で、その後は極めて短時間のうちに勝敗を決してしまつた。日本海々戦に於て前古未曾有の大勝利大殲滅戦が出来たのは、この緒戦期に於ける東郷司令長官の決断に依ること、最も大なるものがある。

この決断は、東郷司令長官の人格と長年海上の指揮官として、平戦時を通じて自ら訓練修養せられたる結果であると思ふ。殊に、前年（三十七年）八月十日の海戦にも丁度これに似た海戦があつた。即ちこの日、我が艦隊は旅順より出掛けて来た露國艦隊とばつたり出會つたのである。そして先づ反航戦を一通り戦つてから、大角度の反轉を行つた。之れは彼我の速力差で漸次敵の先頭を壓する必要があつたからだ、しかしこれが爲に數時間を要した後我戦艦戦隊は敵艦隊の先頭を扼する結果となり、漸く敵の先頭にある旗艦に命中弾を送り、先頭艦が舵機を損じ、急旋回をして彼等の艦列の中に突入した。これが爲め敵の陣形は悉く亂れ

我が方の大勝利となつたのであつた。勿論、日本海々戦の如き大規模な戦果ではなかつたが、わが方にとつては實に尊い體驗であつたと云へよう。

この尊き體驗が、日本海の緒戦期に於いて、東郷司令長官獨特の勘となり、自然と右手を大きく振られたのだと伺つてゐる。實にこの時の右手こそは日本艦隊を全勝せしめ日本を救ひ畏れ多くも 大元帥陛下より「朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懌フ」との實に何とも云へぬ御勅語を拜するに至つたのである。

——艦隊の最も不幸な時に、全艦隊の士氣を維持した司令長官の態度と並び併せて、實にこの二つは東郷元帥の國寶たる所以であると信ずる。これ等を思ふとき何と云つても、最後は人である。精神である。東郷元帥は實に海國日本が生んだ世界的聖將であつた。今やわが海軍は「吾等海軍々人はいつも軍艦旗を仰ぎ見つめて居ればよい」といふ元帥の御遺訓を守つて、いよく奮勵努力して居るの

である。

今日、大東亞戦争の途上、この國歩艱難の時に、元帥の居られぬのは洵に残念である。私は、日常の生活に於いて、元帥の御遺徳にあやからうとするの念は、昔も今も否、日毎に濃くなつて行くばかりである。

まことに、東郷元帥は國寶であり、日本海軍の大黒柱であつた。

率先躬行の辯

艦橋に立つて、怒濤逆巻く海洋を睥睨してゐると、海國日本の重大なる國防といふことがひし／＼と感ぜられる。

そも／＼軍艦にしる、兵器にしる、それ自身は如何に優秀であつても、これを活用するのは即ち人である。従つてその戦闘航海中には、階級の上下を問はず一人々々が、それ／＼一艦の死命を制する重要な職責を分擔して居るわけであつて、それ丈に各種の命令を發する艦長の責任たるや甚だ重い。

今その一例を舉げてみれば、先づ艦が港を出る時入る時には、必らず艦長自らが艦を操縦するのである。航海長と雖もこの時は、艦長に必要な補助的作業をするに過ぎない。そして艦が港を出て、洋々たる大海原に出るとその時初めて艦長は「では艦を渡すぞ」かう云つて、艦の操縦を航海長か或ひは當直將校へ渡す

のである。これ程大きな責任を持つてゐる。

従つて艦長には軍艦操縦上の技倆が大切であつて、如何に陸上では氣の利いた大佐であつても又如何に事務的才能が優れて居つても、一度艦長になつたからには技倆が伴はなければ落第である。艦の操縦が下手であつたり、出入港にも洋上の操艦にも失敗許りして居るのでは、艦長の資格がない。部下からは自然と輕視せられるし、暗礁にでも乗り上げたら早速頸になつてしまふのである。

又戦時は勿論、平時の訓練の時でさへも、艦長には、非番休みと云ふものがない、艦長は一人で交替する者がないからである。これは航海長も同様で、艦長と航海長とは、演習、訓練の時には一日二十四時間の中、ほんの十分か十五分艦橋で假睡をする程度である。他の士官や下士官兵員たちには、二直三直と交替休憩の時間があるが、艦長にはそれが無い。そこで自然兵員達は「俺達が休んで居る間も——」と云ふ譯で、艦長に同情の念を持つようになる。同情といふものは、

上から下へのみ爲されるものではない。下から上へ集る同情——これが喜怒哀樂を共にする艦上生活の根底を爲すものであらうと思ふ。

千變萬化の大自然を相手とする海上生活では、一時的の偽善や誤魔化し等は、絶対に通用しない。又、四六時中艦に起居を共にして居るのであるから、艦長始め兵員の末に至るまで、そんな事はしたくも出来ない。こゝに必然的に海軍軍人の性格が生れるのである。

大は主力艦から、驅逐艦、潜水艦、掃海艇の小艇に至るまで、一艦は一つの家庭であり、艦長は父であり、副長は母である。水雷戦隊などでは旗艦が澤山の驅逐艦を引連れて海上を駆け廻るのであるが、その姿はまさに親と子の關係である。旗艦は、親船であり、その旗艦のもとに子の艦艇が離合集散する。實に見ても美しい情景である。これは何も軍艦に限つた譯ではない。南氷洋や北氷洋に出漁する捕鯨船隊にも亦かくの如き性格がある。廣い大海原に乗出すと必然的

にさうした關係が生れてくるのであらう。捕鯨船は親で、キャッチャーボートはその子である。

近來、東條首相が云はれた「陣頭指揮」といふ言葉は、誠に結構だが、この事は海軍では既にとうの昔から實行して居る。「率先躬行」といふ事は海軍のモットーである。

海軍では戦時は勿論平時に於いても、いつも旗艦が眞ッ先に進むのである。勿論、その前に若干の部隊が前衛又は露拂ひ的に進むこともあるが、各種艦艇は旗艦に後續して進む。そして先頭にある旗艦の艦橋にあつて司令長官は艦隊の指揮を執り、戦艦旗艦の艦橋にあつて司令官は戦隊の指揮を執る。驅逐隊司令は先頭の驅逐艦にあつて指揮をとり、潜水隊司令は先頭の潜水艦にあつて指揮をしないと云ふ工合である。

従つて上の階級の者が下の階級の者の仕事を知らぬとか、或ひは自分で出来な

いといふ様なことは、絶対にあり得ない。それは、下の仕事を體驗しつゝ階級が進むのだから總て經驗済みの譯で、それだから上の者は下の者へ絶対睨みが効くのである。

たとへば、一艦の副長がその乗組の青年將校の機動艇や水雷艇等の操縦が下手で、艇を破壊したりした時は、副長はこれ等青年將校を集めて、

「俺が若い時は、斯く斯くの方法で遣つたものだ」

と云つて聞かせるが、それでも尙呑み込めない時は、

「俺が遣つて見せるから、皆、見て居れ」

と云つて、實際遣つて見せる。これには一言もない。參謀長や司令官が、部下の艦長を叱る時にも亦同様で、

「俺が艦長の時は、斯く斯くの如く遣つた。各艦長もそういふ風に遣つたら宜しからうと思ふ」

と云ふ風に、凡て體驗を積んだ人が、上長となる。それだから縦の統制と横の緊密化がびたつと行はれて生きた作業が出来るのである。

私は、往々にして今の世間に下の者の仕事も出来ず、判りもせず、いきなり成り上りの上長の地位に就いて居る人々を散見するのであるが、かゝる有名無能の上長者を頂いて、どうして下の者が一致團結、良い仕事が出来らうであらう。こゝらふ點は、須く海軍式に改めてほしい思ふ。

次に、海軍では協同一致の精神といふものを重んじて居る。絶対に功名争ひや先陣争ひなどといふことをしない、功名を競ふといふことは、士氣を鼓舞する爲に時には必要であるが、この功名心さへ全體の爲には殺さねばならない。一番槍とか一番乗りの氣分には若干私心が含まれて居る。

此の私心を若し海軍でやつたなら、協同作戦は全然出来なくなつてしまふ。この協同一致の精神こそ、いつの時代どんな社會に於いても最も必要なものではな

からうかと思ふ。

兵學校での棒倒しの話は、前にも述べたが、この時代から培はれた共同一致の精神が年と共にいよいよ長養發展して今日の海軍全體の中に生き／＼と流れてゐるのである。今日の戦争でも、彼のマレー沖海戦に先立つてわが潜水艦は、シンガポールの港外で敵のプリンス・オヴ・ウェールズとレパルスが出てきたのを發見した。

そこで隱忍自重この兩艦の踪をつけつゝ、その行動を司令部に報告した。司令部では直ちにこの報を受けると飛行隊に出動を命じ、遂にあの大戦果を挙げたのである。

而もその撃沈の報を受けるや潜水艦長は涙を流して喜こんである。自分の小さな功名心を犠牲にして全海軍の戦果のためにつくした艦長の心——かうした例は今次の戦争に澤山にある。一致團結の精神の如何に偉大なものであるかはこの一

事でも判ると思ふ。

上に立つ者が率先躬行、而も後に續く者が協同一致、而かも皆私心を去る。この構へが出来上れば、戦争が如何に長期に亙らうとも、ピクともするものではない。私は今日の國民諸君に切にこの心構への完璧を期せよと叫びたいのである。

加藤寛治大將を想ふ

加藤大將が華府軍縮會議に首席専門委員として出席され、英米の不當なる壓迫に對して、血涙を絞つて奮闘されたことは、世間既に悉く承知のことであらう。而もその折、會議は我に利あらずして遺恨骨髓に徹した大將は、深夜全權の部屋に押掛けて、その憤慨の情が餘り劇しいので、加藤に若し間違ひでもあつてはと警戒された事もあると聞いてゐる。大將は、實に至誠忠勇なる典型的な武人であつた。

私は大將がこの華府會議から歸朝されたとき、丁度大學の教官であつたので、校長たる加藤大將（當時は中將）を東京驛に出迎へた。所が大將は列車から降りるなり、

「残念だが、我々は負けて來た、申譯がない」

と云ふ様なことを云はれ、殆んど泣かんばかりの顔色であつた。當時大將の首に大きな腫物が出来て、それも苦痛な御様子だつたが、この時の大將の表情は全く悲壯そのものであつた。出迎へに出た我々も思はず涙がこみ上げてくる程、残念に思つた。

大將は直ぐにそれから築地の某病院に入院された。そして腫物の全治されるのを待つて、直ちに會議の經過報告の爲、東郷元帥の御邸に行かれたのであつたがその時の模様を小笠原中將から聞いた私は、いよ／＼大將が帝國海軍を思ふ至誠の権化であることを知つて、深い／＼感激に打たれた。

その時、大將は泣きながら残念がられたといふ。英米の不當なる壓迫を泣いて憤ほられたといふ。するとそれ迄黙つて大將の言葉を聞いてをられた東郷元帥はたつた一言

「量の制限は條約で定められた以上致し方はあるまい、然し、訓練には制限は無

のいだらう」

と言はれたといふのである。流石は聖將の言である。この一言に恬然として進むべき途を示された大將は、朗かに元帥邸を辭すると、それ以來ぶつ／＼泣言を止め、直ちに元帥の教へのまゝの途を實行されたのである。

わが海軍が決死的猛訓練を開始したのは、實に加藤大將がこの時の元帥の教へを率先陣頭に立つて行はれたからである。そしてその猛訓練の結果は、技術者の方面にまで大きな影響を及ぼして「こりや、とても尋常のものを造つてゐたのは駄目だ」といふ信念から造船家や造兵官も全く死物狂ひになつて研究に拍車をかけるやうになり、遂に今日の無敵海軍の基礎を築いたと見ることが出来るのである。

かう考へて來ると、加藤大將こそは東郷元帥の遺鉢を繼ぐ帝國海軍中興の祖と稱すべきであらうと思ふ。

大將は大正十五年十二月聯合艦隊司令長官に親補され、翌昭和二年四月に大將に親任せられたのであるが、恰度その時艦隊は支那の青島に在泊中で、加藤司令長官は我々幕僚を従へて青島神社に參拜中、大將親任の電報が到着した。そこで艦隊の將兵たちはいづれも我事の様喜んで、早速大將旗を整へ、これを望んで大いに士氣を擧げたものである。そして愈々決死の猛訓練に邁進を誓ひ合つた。

私は、昭和二年と三年の二ヶ年、第一年は加藤司令長官の參謀長として、又第二年は艦隊航空戦隊司令官として同大將の下に海上で仕へたが、就中、昭和二年の美保關事件の際に於ける大將の悲しみを内に藏した毅然たる態度には、全く心打たれた。

如何に猛訓練とは云へ、餘りにひどすぎるといふ世間の囂々たる非難の眞只中に立つて、大將は、私に向つて

「構はん、斷々乎としてやれ」

と言はれた。この時の大將の嚴然不動たる態度。そして心の内に今は亡き部下を弔ふ愛着の涙を隠して、一路米英撃滅の信念に火と燃えてをられた大將の姿——私は今日思ひ起してしみじみとした懐かしさと尊敬の念に一杯である。

加藤大將は慶應元年、幕末の傑人松平茂昭等を出した越前福井藩の砲術師加藤直方を父として、呱呱の聲を擧げられた。大將の公生涯に、武士的氣慨の高鳴つて居たのも、その藩風の然らしむるところであらう。世間では、加藤大將を、頑固一徹の荒武者の如く評する人もあるが、それは大將を知らざる人の言である。

大將には、豪放たる半面、實に緻密なる用意周到さがあつた。艦隊司令長官在任中も、自分達が提出する諸種の訓練や演習の計畫案に就いては、實によく検討され、研究されて決裁をされる。訓示の如きもいつも自分で草稿を書かれたものである。

又その私生活は實に磊落で、古武士の面影があつた。私は大將の下に勤務中大

將と一緒に酒席に連なつた事もあつたが、大將は酒は中々豪傑である。多勢の士官を前に、日本海軍の前途を論じ、太平洋上の風雲を論じ、興到れば共に多情多恨の船唄を歌ふ。又、時には俳優の物真似もされた。

殊に幸四郎、梅幸、羽左衛門等の真似が上手であつた。幡隨院長兵衛の風呂場の場面が、極めて御得意で、それは幼時母堂に連れられて時々芝居を見に行かれるうちに自然に覚えたものだと言つて居られた。要するに熱血の男子であり、而も涙のある情の人でもあつた。それ丈に部下の司令官など、いづれも皆心から司令長官を慕つてをつた。

昭和十四年二月九日、熱海の假寓で長逝されたと聞いたとき、私は無限の寂寥感に打たれた。そして今日帝國海軍のこの赫々たる大戦果を見るにつけても、せめて今日の大戦果を、お見せしたかつたと思ふ者は、豈私ひとりではあるまいと思ふ。

眼を閉ぢると今日なほ私の脳裡には大將の面影がはつきりと浮び上つてくる。嚴にして慈、峻にして和、偉大なる提督の風格が、まさしくと甦つてくる。

まことに、加藤大將こそは、わが無敵艦隊中興の祖と仰がれるに足る大人物と申すべきである。

九軍神の葬儀に参列して

過般、日比谷公園で行はれた故岩佐直治中佐以下、特別攻撃隊の方々の合同海軍葬に臨んで、私は感懐轉た切なるものがあつた。

今更こゝに説くまでもなく、特別攻撃隊九勇士は、實に全國民の忠誠奉公の心を振起し、鼓舞したものである。

私は、今回のハワイ作戦の話を聞いて、直ちに山本司令長官にお祝の手紙を出したところ、その返事の中にいろ／＼と飛行隊及び特別攻撃隊のことが書いてあつた。そして、その末尾に左の一節があつた。

「兵學校卒業一年未滿の若者共と加ふるに此の決死隊が暗夜敵港に突入して、此の成果を擧げたるを思へば、今の若いものはなど、口幅つたきことは申間敷としかと教へられ、此れ又感泣に堪へざる次第に候。大戦の前途は眞に遼遠にして幾

多の苦難相次で生ずべきは深く觀念し居り候へ共、我青年將兵の意氣と技倆とは概ね上述の如く、肅然襟を正しふして敬意を表するに足るもの有之候へば自戒奮勵誠心奉公に邁進すれば、希くば聖旨に副ひ奉り得むかと三思致居候云々」

九勇士は、いづれも二十歳を僅かに上に出た弱冠の人たちばかりであつた。即ち、岩佐中佐は二十八歳、横山少佐は二十四歳、古野少佐は二十五歳、廣尾大尉は二十三歳、横山少尉は二十六歳、佐々木少尉は三十歳、その他二十七歳の上田兵曹長、二十五歳の片山兵曹長、二十八歳の稻垣兵曹長である。

而も大本營公表の特別攻撃隊の真相によれば、この日を覺悟した岩佐大尉以下士官たちは、これを艦隊長官の許可を得て、始めて實行に移したものであるといふ。そして部下としては、信賴すべきものをそのまゝ引き連れて向つた。しかもこの特別攻撃隊の完璧を期するため、造船官は勿論工員の人々まで、晝夜兼行寢食を忘れて、血と汗の結晶による潜航艇を完成したのである。これが實行に至る

までは、實に尠なからぬ日月を要して居るのである。その間、彼等は迫り来る死を前にして、従容として、この完成に訓練に心魂を打ちこんで居たのである。

事に激して死するは易し。しかし、死を覺悟して、數ヶ月間の苦心の研究訓練を積み、しかも決死の實行につく勇士の心こそ、まさに壯烈無比のものではなからうか。

山本司令長官は、これら前途有爲の青年士官を生きて還らせる方法に就いて、いろ／＼と考慮を巡らされたのであらう。大本營の發表にも、

「特別攻撃隊員は、勿論生還は豫期しては居ないにしても、司令長官としては十分その歸還救出の方途が講じられてゐるのを確めて後に、始めて許可したものである」

とあり、死地に赴く部下達への山本司令長官の哀惜の情を偲び、私は葬儀に列しながら一入の感慨に打たれた。そして、且つて日露戦争當時、東郷元帥がかの

旅順港閉塞隊に對して、再三再四その乗組員收容の方途が、十分に講じられてゐるか否かを確めた後に、始めて許可を與へられたことと思ひ合はせて、ゆかしい名將の心情を想ひ胸迫るを覺えたものである。

しかし、特別攻撃隊員は、唯敵を仆すのみの意圖を以て満ち、何等他を考ふることなく、嬉々として出發したのである。即ち、彼等の心中は、唯敵を斃さば死すとも悔ひまじとなす氣持であつたに相違ない。更に、これらの勇士の一部は晝の戦鬪に於ける戦果を注目しつゝ、夜の到るを待ち残存敵主力艦に對し、徹底的に攻撃を加へて、これを轟沈せしめ、遂に自らも還らぬのであつた。美しくも亦、崇高なる盡忠報國の精神であり、壯烈なる海軍魂の發露である。

合同海軍葬の行はれるこの日、嚴肅、莊重なる式場には、一億國民の新しき感激と感謝が漲つて居た。

私は、島田海相その他參列諸官の祭文奉讀中、いく度、烈しく胸を搏たれたか

知れない。關係各方面から贈られた花環に埋もれて、祭壇の九勇士の寫眞が、その若々しき唇邊に、微笑をさへ湛へて居る。私はその寫眞をジッと見詰め乍ら「近頃の若いものはなど、口幅つたきことは、もう決していふまじきこと、しかと教へられ候」

といふ山本司令長官の手紙の一節を、しみじみと思ひ出してゐた。

參列の市民の群は何時までも續いてゐる。

——その歸途、私はまたハワイ空襲時に於けるある少年飛行兵の一人の挿話を合せて想ひ浮べてゐた。

それはあの時三番機で出發した一少年飛行兵の話である。一番機、二番機が既に命令通り魚雷を發射して上昇してしまつた後、その少年飛行兵は命ぜられた通りの射撃に移らうとしたが、十七メートルの強風のため、どうしても機體が流されてしまふ。どうしても射點が外れてしまふ。そこで彼は、もう一遍廻つて狙つ

たが、又もや失敗に歸した。そこでもう一遍廻つた。その間一分間に何萬發とも知れぬ彈丸が飛んでくる。その厚い彈幕を冒して、三回目によつと正確な射點を得て魚雷を發射したのである。

「若しも射點をしくじつたら、やり直せ、何遍でもやり直せ、さうしてこれなら中るといふ點に行つたら初めて射て！」

彼はさうした激戦の最中にも平素の教官の教へを嚴として守り抜いたのである。かゝる激戦の眞最中、少し位射點が外れたと思つても落してしまひ、よしんばそれが命中しなかつたにしても、誰も監視してゐるわけではなし、敵艦から「何番小隊の何番機は本當の射點でない所で魚雷を射つた」といふ報告などの來る筈もない。それにも拘らず彼には「失敗すれば三遍でも四遍でもやり直す、中らぬと判つてゐながら射つといふやうなことは死すとも斷じて出來ない」といふ堅い信念に燃えて、生死を越へた命令實行、任務遂行に突進して行つたといふ。

空にこの勇士あり、海底に鬼神を泣かしむる九軍神あつてこそ、大東亞戦争緒戦のあの真珠灣攻撃の大戦果は生れたのである。

私は晴れ渡つた夕空を眺めながら、ふと九軍神と併せてこの話を想ひ出した。そしてもう一度、

「近頃の若いものはなど、いふ口幅つたきことは、もう決していふまじきこと、しかと教へられ候」

といふ山本司令長官の手紙の一節を、しみじみと噛みしめたものである。

日本の母

日本の軍人は、單なる五尺の身體に武器をとつて戦つてゐるのではない。戦つてゐるのは魂である。一死君國に報ひんとする大和魂が、忠勇なる將兵の肉體を驅つて奮戦せしめるのである、それ故に強いのである。

そしてこの大和魂をいやが上にも昂揚せしむるものは、實に日本の母の力であると思ふ。

「家の事は心配するな、天晴れ手柄を樹て、家名を辱かしめるな」

この母の心が、遠く戦線にあるわが子に通ひ、將兵をして、烈々たる攻撃精神に燃えしめ、驚くべき戦果を收めしめるのである。御存知の通り、昔の小學國語讀本に「水兵の母」と題して、明治二十七、八年戦役豊島沖海戦ほうとう當時の物語が載つて居る。又日露戦争當時には、かの有名な「一太郎ヤライ」の物語もある。

づれも母が我が子を勵まして、一死報國の念を固からしめた尊い物語である。又旅順口閉塞の決死隊が選拔せられた時、志願者にその理由を訊けばいづれも、異口同音に、

「母が、かく申しました、母が、かう云ひました」

と答へるものが、多かつたと云ふ。

爾來、幾十年の歳月を経たが、この精神は日本の母に變ることなく流れ傳はり今次大東亞戦争に於いても、幾多の軍國の母が出現して世人の感激を集めて居る。眞珠灣内深く、殉忠の華と散つた九勇士が、揃ひも揃つて皆立派な母をいただいてゐることも、まことに意義ある事實である。

昔から「忠臣は孝子の門より出づ」と言はれて居るが、母を思ふ勇士の純情、子を想ふ母の慈愛、こゝにわが皇軍の強さが生れることが、はつきりと解るのである。私は、日本の母の力が、如何に大なるものであるか、唯々、驚嘆し、敬意

を表するの外はない。

私は、偉大なる日本の母として、畏れ多いことながら、神功皇后と大楠公夫人を尊敬して居る。

神功皇后當時の我國は、恰も大東亞戦争前の日本のやうな、非常な國難に直面してをつた。A B C D包圍陣内に殆ど孤立して居た如く、三韓を通じて日本は危機に瀕して居た。その時、神功皇后は御遠征の途次、仲哀天皇を喪はれて、軍を返し御歎きの底に沈まれるかと思ひの外、敢然として、天皇の喪を御秘めになり、軍船を調べ附近の邪敵を攘ひつゝ三韓にまで軍をお進めになられたのである。

日本が海外に遠征したのは、實にこの時が始めてである。しかもその時御懷妊あそばされて居られた御身に、重い鎧をまとはれて外征され功を御擧げ遊ばされ御歸國になつて、皇子を御生みになつた。

應神天皇である。

私は、そこに尊い日本の母性の姿を見出す。

大楠公夫人に就いては、有名な櫻井驛の教訓が、非常に正行を刺戟したのであるが、正行をして正行たらしめ、又楠一家をあれだけにした母として偉大なる功績を偲ぶ時、感激せざるを得ないのである。

翻つて、今次の特別攻撃隊九勇士の母を思へば、感激は更に新たに深い。愛兒を中學校へ通はせる爲に、睡眠時間を割いて楮の皮剥ぎに夜を更かし、女の肩に二十貫の材木を擔つて勞銀を稼いだといふ上田兵曹長の母。曉に起き出でて村社に日參すること七年、その子の戦死の報を聞くや「よくやつてくれました、これで私も務めを果すことが出来ました」と、顔色一つ變へずに云つたといふ横山特務少尉の母。「男子出生せば、幼少より武士道の義魂を訓へよ」といふ藩侯の教へを脊々服膺すること七十年、天晴れその子を軍神たらしめたのは、横山少佐の母

である。他の人々も、皆大楠公夫人に優るとも劣らぬ、神の母、日本の聖母とも云ふべき母ばかりである。この九勇士の母たちが、喜んでその子を國家に捧げた氣持は、日本の母一人残らず共有するところであらうが、九勇士の母こそ輝かしき代表として、高く標置さるべきであらうと思ふ。まことに母の力がその子並に國家に及ぼす影響は、頗る大なるものがあると思ふのである。

x

私は、日本の母たちが、九勇士の母の如くますます人間として學を修め、婦徳を磨かれんことを切望して已まない。そして、海洋日本の生命である海を怖れず、海に親しみ、海を理解して、偉大なる海國の母たるべき教養と情操を養はれんとを併せて望むものである。このことは今日我國が當面する大東亞建設と直接深い關係があり、海國日本のいよく大を成す所以の道に外ならぬと思ふ。

わが皇軍の勝利は、實に日本の母の勝利である。私はこの事を固く信じて疑は

なり。

私が、かうしていま筆を執つてゐる瞬時に於いても、わが忠勇なる將兵は、母の姿を、母の激勵を、胸深くに抱きながら、敵の彈道下に勇戦力闘して居るのである。世界に冠たる日本の母。私はこれからの女性すべてが、いよく益々立派な日本の母となるやう若いうちから心の修養と身體の鍛鍊に精進されんことを切に希望して止まない。

青年諸君に望む

大東亞戦争下、私が特に青年諸君に望みたいことは、あくまで堅固なる思想を持つて進めといふことである。近代戦の特徴は、それが長期戦であると同時に前線にある戦闘と併行して經濟戦、思想戦を伴ふといふことで、いくら戦闘に勝つても、經濟戦、思想戦に敗れたら最後、勝利の榮冠を博することは出来ないのである。そこで如何なる困苦缺乏が襲ひかゝつて來やうとも、如何なるデマ宣傳が飛んで來やうともピクともせず、必勝の信念を持つて、邁進することこそ、今次大戦をして有終の美を結ばせる所以であるのだ。

殊に思想戦は目に見えぬ敵だけに怖ろしい。

前歐洲大戦に於いて、ドイツは武力戦に勝ち乍ら、思想戦に破れた結果國內から崩壊してしまつた。これを以つてみても、近代戦を戦ひ抜く爲には國民全體が

一丸となり、どこ迄も戦争目的達成の爲に、不動の心構へを持つて各々がその職域に於いて、一切の私心を抛擲して只國家の爲、大君の爲に總てを捧げて行かなければならぬ。

かくしてこそ始めて、われ等日本國民は大東亞の盟主として、世界を動かす中心勢力となり、大東亞共榮圈を確立することが出来るのである。そしてこの一事こそ、我等が祖先に對して、爲さねばならぬ我々の義務である。

今や、大東亞五億民衆の期待は、一に懸つて我等日本人に集つてゐる。而もこの大東亞建設といふ大きな仕事は、一年や二年の短時日のうちに成されるものではないことは明である以上、この大事業は一に懸つて、現在日本の青少年諸君の双肩に懸つてゐるのだ。これを思ふとき諸君の責任たるや實に重大である。

そこで私は最近私が目撃した感心な青年の挿話を話して、諸君の参考に供しようと思ふ。

それは昨年の夏の事であつた。私が八ヶ岳の日本青年協會の道場を訪問しようとして大泉驛で下車すると、驛に一人の若者がわざ／＼私を出迎へに來て呉れて、ゐた。見るからに逞ましい青年で、名前は小宮山福一君といひ、二十一歳であるといふ。訊いてみると小宮山君は別に學歷とはなく、村の青年學校を卒業後、十七歳の時日本青年協會本部の青年長期講習に参加し、以來大泉驛前に小屋を作つて本格的に開墾作業を續けてゐるといふ感心な青年であつた。

而も同君はその爲に、毎日人より二時間づつ早起をして、雨の日も風の日も休むことなく孜々として開墾作業に専念し續けてきたのだといふ。さうして二ヶ年間に見事三町歩の開墾を完成すると、その傍、他の高原農場の視察を行ひ、適作物の研究に没頭して、この土地に白菜栽培の可能なることを發見したのであるといふ。そして直ちに試作にかゝつたが、最初の年は血の出る様な努力にも拘らず收穫皆無といふ慘澹たる状態であつた。

そこでこれを見聞した村人達は、

「この八ヶ岳の山麓から白菜がとれたら、お天道様が西から出る」

といつて嘲笑し、笑つて同君の仕事をケナシ散らした。

然し同君はひるまなかつた。翌年も更に數倍する努力を拂つて自己の信ずる所に向つて邁進していつた。所がその結果は又殆んど皆無といふ状態。大抵の人間ならこゝらで落膽の餘り放棄してしまふのが關の山である。

然し剛健不屈の精神に富む小宮山君は、この失敗にもこりず更に勇氣百倍、世間の嘲笑などをよそに總ゆる努力を拂つて栽培を續けていつた。そして三年目の秋、とうとう白菜栽培に成功したのだといふ。

かくて艱難汝を玉にす——で、小宮山君の努力は遂に報ひられて、何と六百圓の収入となつたのである。以來今日では千圓以上の純益をあげてゐるといふ。

私は以上の話を聞いて一口に三年目といふが、それは同君にとつては實に並々

ならぬ忍耐と努力の年月であつたらうと思ふ。而もその後、ある部落で會旗を作つたり、事業を始めたりするのにどうしても百五十圓の金の必要が起つたが、その金の出所がなく窮してゐるといふ話を耳にした同君は、

「私がお金を寄附いたしませう。然し尊いお金ですからたゞ差上げる譯には行きません。男女青年團員が總動員で勤勞奉仕の積りで、一日私の畑の草むしりをして下さい。さうしたら快くお金を差上げませう」

と部落の世話人に洩らした。これを聞いた部落の人達は大喜び、それではといふので早速一日みんな畑の草むしりの手傳ひをして、その資金をあがなつたといふが、かう云ふことは仲々容易に出来ないことである。

小宮山君は今では村の先覺者として、村の青年團の指導に當つてゐるが、村長の推薦を得て山梨縣から八ヶ岳高原植物看視員を命ぜられ、現在も實直に働いてゐる。

私は以上の話を聞いて、實に感心した。自己の信念に向つて雄々しく突進してゆく同君の態度、たゞ眞劍に土と取組み黙々として自己の本分に邁進する同君の態度——これこそ今後の青年が持つべき心構へであらうと思ふ。西郷南洲は「金もいらぬ、名譽もいらぬ、名もいらぬと申すものは洵に怖ろしい」といふ意味のことを云つてゐるが、全くその通りである。一切の名利を捨て、一切の私心を去つた人間程偉いものはない。

私は偶々八ヶ岳を訪問して、これからの時代の青年は小宮山君のやうにありたいと思つた。不動の信念に生き、率先躬行する。私心を去つて天業翼賛に邁進する——こうした人物こそ、これからの「偉い人」と稱すべきであらうと思ふ。

南方問題と濠洲

私は、日一日と建設せられつゝある南方共榮圏を見るにつけ、幕末の偉大なる經濟學者佐藤信淵の「海防策」といふ著書に、今更ながら新らしい敬意を拂はざるを得ない。

その本の中で、信淵は「歐羅巴人の東洋侵略を説き明かし、特に英國人の跳梁を問題にして、日本がそれに對し如何なる手段を執るべきか」を教へてゐる。彼は曰ふ。

「先づ伊豆の七島より船を出して、南洋中の無人諸島を開發、八丈島等へ土地の狭く人の多き地より人を遷し植ゑ、次第に其地を開き新田耕農の業を興し、又無人島より船を出して、その南洋の中なるヒリピン等の諸島を開拓し、悉くその産物を聚めて、清朝、安南、暹羅の諸國に交替し、ます／＼諸島に經略して琉球

國と犄角をなし、不意に舟師を出して呂宋と巴刺臥亞の二國を攻取るべし。此二國は共に氣候温熱にして、物産極めて豊饒なり。悉く是を合聚して以て諸國に交易し、此二國には兵衆を置き、武備を嚴にして、以て此地を鎮護し、此二國を以て圖南の基礎となし、此地より又舶を出して瓜哇、渤泥より以南の諸州島を經營し、或は和親を以て互市の利を收め、或は舟師を遣して其弱手を兼ね、其要害の地には軍卒を置き武威を振つて、以て南洋に兵を輝やかさばイギリス人猖獗なりといへども、敢て東洋を窺ふことを得べからざるなり」

と述べてゐる。實に雄大にして卓抜なる南進論ではないか。而も信淵はこの堂々たる卓見を文化六年——ペルリ來朝の四十四年以前に述べてゐるのである。

私は幸ひにも若い頃から屢々南洋に行くの機會に恵まれてきた。従つて、南方問題に對しては、早くから信淵の卓見に敬服しながら、久しい以前から考慮してをつた。

「わが日本が、將來東亞に於て更に大を成す爲には、どうしても南方の國々と握手して、未開拓のまゝ、打ち捨てられてゐる廣大なる南方の土地、豊富なる資源を活用して行くことが必要である。そして南方諸民族をその悲惨なる境遇から解放救助することこそ、大東亞の盟主日本の責任である。南方の國々も、將來日本を離れては、どうしてもやつて行けないであらう。これは運命的な關係であると思つてゐる。彼は原料を賣り、我は製品を賣る。この唇齒輔車の關係は大東亞發展の絶對條件である。それ故に日本國民一人残らずが、もう少し南方に活眼を開き、注意を拂つて、積極的な國策を樹てることが必要である」

私は、さういふ風に考へて、機會ある毎に人々に説いて來たのである。しかし當時に於いては、南進論を唱へることは、餘り歓迎されなかつた。寧ろ却つて叱られたりしたものであつた。それが、最近ではどうであるか。これは大東亞戰爭下の國民として當然なことではあるが、——南進論と南方研究と云ふことが、私

などの吃驚する程、旺んになった。そして今や、南方問題は議論や研究の時代を一足飛びに跳び越えて、実行の時代に突入してしまつた。誠にうれしい事である。

そこで思ふことは、わが大和民族こそは、將來南方民族を誘導すべき重大なる使命をもつてゐる唯一の盟主であるといふ自覺をお互に確かりと持つて、從來米英政府の行つたやうな愚民政策を一掃し、眞に大東亞共榮圏の一員として、これ等諸民族を育成指導してゆくことであると思ふ。

而して南方資源の問題については、近來種々の人がいろ／＼の角度から紹介してゐるので、これに就いての私見は差控え、こゝでは濠洲に關して自分の所見を述べてみようと思ふ。

大東亞共榮圏が確立され、日本がその盟主として諸民族を誘導してゆく上に一番大切なことは、人口問題であらう。僅か七千萬の大和民族でこの重大任務を遂

行してゆくことは困難である。どうしてももつと／＼人口の増加を計らなければならぬ。この大東亞共榮圏には今の英領印度も、濠洲も、又その北方の諸島も當然ふくまれてくる譯であるから、これ等廣大なる地域を永久に維持發展し、その彌榮を招來するためには、どうしても純粹なる大和民族の増加が必要である。二億も三億もの人口が欲しい。

目下政府の人口政策によれば、大和民族は日本及滿洲で増殖する計劃のやうであるが、私はそれ丈ではまだ／＼足りないと思ふ。もつと積極的にグン／＼人口の増加を計つて行かなければ追付かない。それなら熱帯地方はどうか。マライ、ヒリッピン、ジャワ方面もよいではないかと云ふ人があるかも知れないが、私はこの意見には賛成できない。

成程、此等の地方は一見土地も廣く人口は尠ないし、將來大和民族が發展増殖してゆくのに適してゐるやうではあるが、私は大體熱帯地方は資源を獲得する地

方であり、一家で云へば臺所の如きものであると思つてゐる。この意味に於て大東亞共榮圏の熱帯地方は世界第一の臺所であり、大資源地であるが、そこで人口を増加する方策を採ることには賛成できないのである。

と云ふ理由は、元來日本には春夏秋冬の四季の移り變りがあり、酷暑の夏もあれば嚴寒の冬もある。この自然の環境が國民を自然のうちに鍊成して、國民には氣魄があり、勤勉、努力の美風がある。所が南洋地方は所謂常夏の國で、いつも烈々たる太陽が照り輝いてゐる。その爲日本ではずるぶん勤勉な精力家でも、南洋に行くとき非常に活動力が減殺されてしまふ。例を蜜蜂にとつてみると、日本から南洋に蜜蜂を運ぶと最初の内は例の通り勤勉に飛び廻つてゐるが、花は何時までも枯れずに後から／＼と咲くので、蜜蜂先生すつかりのびてしまひ、ある程度以上には働かうとせず、すつかり怠け者になり切つてしまふ。そしてこの眞理は蜜蜂のみでなく人間にも及ぼすのは又已むを得ないことで、所謂南洋ポケといふ

奴になつてしまふ。

従つて南洋で生れる赤ン坊が、年と共に何時かボケる氣味があるのは事實らしい。大和民族の精力、努力、勤勉性が減殺されるやうなことがあつては大變だ。そこで、日本と滿洲だけでは狭過ぎるし又南洋地方は人口増加に不適當だとすると、何としてもこゝで濠洲に思ひを及ぼさざるを得ない。濠洲はその南半殊に東南の海岸地方は氣候も溫和だし、景色はよいしよい所だ。殊にメルボルン島、タスマニヤ、ニュージーランドなどは實に繪のやうに美しい。しかも濠洲は永年の白濠洲主義の結果、今日でも尙ほ人口僅かに七百萬——丁度東京市程の人口しかない。それがあの濠洲大陸に散在してゐるのだから、實に寥寥たるものと云はざるを得ない。

そこで濠洲が大東亞共榮圏内に入つたら、大和民族は早速に夫婦手を携へて、ドシ／＼この地方へ移住して、こゝで大いに人口増加を計るべきだと思ふ。好適

地たること受合である。そして地球の南北から中央の熱帯地方へ働きに行く、そしては又時々南北の濠洲や日本へ歸つて身心を引締める。かう云ふ風にすれば大東亞共榮圏は永久に發展し得るものと思ふのである。

従つて私は、大東亞共榮圏の中に絶対に濠洲を含める必要があると痛感してゐる。

海を征く

(出文協承認)
あ470045號

昭和十八年三月廿二日 印刷
昭和十八年三月廿五日 發行

(一〇、〇〇〇部)

日本出版文化協會
會員番號120116

● 定價一圓五十錢

發行所	印刷所	印刷者	發行者	著者
東京市東區東水	東京市東區東水	清水	廣安與三右衛門	高橋三吉
三丁目十二番地	三丁目十二番地	一丁目十二番地	三丁目十二番地	三丁目十二番地

東京市東區東水三丁目十二番地
電話九段(33)三三〇〇・三三〇〇・三三二二番
振替口座東京七一二九七番

配給元
日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

東水出版社圖書目錄

皇國の書	詔勅講究所長 森清人著	一・五〇	海釣り三昧	谷口北海著	一・七〇
人間の吉田松陰	品川義介著	一・七〇	將棋上達四週間	八段 小泉兼吉著	一・五〇
海軍省文部省推薦 海軍魂	海軍中將 植村茂夫著	一・五〇	將棋名局を語る	八段 金子金五郎著	一・五〇
陸軍省文部省推薦 陸軍魂	陸軍中將 和田龜治著	一・五〇	將棋と人生	名人 木村義雄著	一・七〇
くろがねの父	永松淺造著	一・五〇	長篇小説 鐵の愛情	諏訪三郎著	一・三〇
海軍航空隊	海軍少佐 富永謙吾監修	一・八〇	愛は惜みなく與ふ中河與一著		一・五〇
船は闘ふ	元淺間丸船長 安東陽一郎著	一・五〇	科學小説 海底トンネル	永松淺造著	一・八〇
筆劍と人	松波治郎著	一・五〇	忍術から スパイ戦へ	寺島征史著	一・八〇
日本名將傳	松波治郎著	一・五〇	明日の海	海軍大將 安保清種著	二・〇〇
若き義勇軍	田村直治著	一・五〇	海を征く	海軍大將 高橋三吉著	一・五〇
シンガポール 卅五年	西村竹四郎著	二・三〇	航空魂 (近刊)	陸軍中將 江橋英次郎著	一・五〇

送料各冊内地一錢五分・外地二錢

208
E

